

【共同研究】

教師が考える児童生徒の協調性

名尾 典子*・登張 真穂**・大山 智子***・首藤 敏元****

How teachers view cooperativeness in schoolchildren

Fumiko NAO, Maine TOBARI, Tomoko OYAMA, Toshimoto SHUTO

The purposes of this study were to clarify (1) what type of person teachers expected their pupils to become, (2) teachers' ideas of cooperativeness, and (3) how teachers assess pupils' cooperativeness. Teachers in elementary schools, junior high schools, and senior high schools were surveyed. Teachers' expectations regarding the type of person pupils would become mostly coincided with their vision of a cooperative child. This view included aspects of active cooperativeness (e.g. collaborative problem-solving and cooperation) as well as the ability to take others' points of view and respect for norms. Aspects of passive cooperativeness, i.e. being more conciliatory and tending to conform, were rated low in terms of what type of person pupils would become and teachers' ideas of cooperativeness. When teachers assessed pupils' tendency to cooperate, they rated schoolchildren in lower grades as highly cooperative and they rated the ability to take others' points of view and the ability to collaboratively solve problems higher from the upper grades of elementary school to junior high school. However, some junior high school pupils tended to be more conciliatory and conform and to be self-centered or uncooperative.

Key words : cooperativeness, assessment by teachers, schoolchildren, collaborative problem-solving, being more conciliatory
協調性、教師評価、児童生徒、協調的問題解決、調和志向

I. 問題と目的

協調性は、人間が集団生活を送る上で必要な社会性の一側面である。協調性は、非利己的で、他者に対して受容的、共感的、友好的に接し、他者と競い合うのではなく、譲り合って調和を図ったり、協力したりする傾向と定義できる(登張, 2010)。協調性は、良好な対人関係の形成や個人

の成長と適応のためにも安全で平和な環境を作っていくためにも重要な特性であると考えられる。登張他(2012)は協調性概念を再検討し、協調性の発達を検討することができる新たな協調性尺度を開発した。さらに登張他(2015)は高校生のデータも加えて再分析し、多面的協調性尺度として改訂した。多面的協調性尺度は、他者に合わせる傾向である「調和志向」、対人間の問題で協調的問題解決をする傾向と他者受容の傾向である「協調的問題解決」、非協調的な行動をとる傾向である「非協調志向」、他者に協力する傾向である「協力量志向」の4下位尺度からなり、協調性の様々な面を表す尺度である。協調的問題解決と協力量志向は協調性の積極的側面、調和志向は協調性の受動的

* なお ふみこ 文教大学人間科学部臨床心理学科

** とばり まいね 文教大学人間科学部非常勤講師

*** おおやま ともこ 白百合女子大学生涯発達研究教育センター

**** しゅとう としもと 埼玉大学教育学部

側面を表していると考えられる。本尺度は協調的な受動的な側面だけでなく、積極的側面、特に協調的問題解決の内容を加えた点に特徴がある。

大学生対象の調査では、協調性と内的作業モデルや仲間関係、サークル活動やボランティア活動との関連が見いだされた(大山他, 2012, 名尾他, 2013a, 登張他, 2013, 大山他, 2013, 名尾他, 2013b, 木村他, 2013, Tobar et al., 2013)。これらの研究の結果から、協調性の発達、子ども自身の様々な経験の積み重ねにより促進され、大きな影響を受けることが示唆されたが、子どもが育つ環境として、学校における教師の意識や働きかけも重要な要因として作用していると考えられる。学校における教師の指導は、協調性の発達において大きな役割を果たしていると予想できる。

また、現場の教師が子どもの協調性についてどのようなイメージを抱いているのかを知ることは、子どもの協調性を育成する上で、より具体的かつ効果的な方策を考えるために役立つと考えられる。学校現場では近年、子どもたちが積極的にお互いの考えを出し合い、吟味・検討し、新たなものを作り出していくような話し合いを中心とした、学びあう授業作りが盛んに行われている(松尾・丸野, 2007)。いわゆる「共同／協同／協働学習」と呼ばれる方法だが、「協同」とは、同じ目的のために複数の個人がともに心と力を合わせ、助け合って仕事をする(新村, 1998)であり、協調性ときわめて関連が深い概念であり、教師の間では協調性に関する関心や志向が以前以上に高まっていることも予想される。

そこで本研究では、小学校、中学校、高校の教師を対象に質問紙調査を実施し、教師が児童生徒たちに対して、どのような人物になることを期待しているのか、集団生活を送るうえで求められる社会性の一側面としての協調性について、教師はどのようなイメージを持っているのか、さらに学校現場で現に関わっている児童生徒の協調性に関する特性や能力をどのように評価しているか、を明らかにする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

小学校教師61名(男性28名、女性33名、20～60代)、中学校教師21名(男性12名、女性9名、30～50代)、高校教師14名(男性10名、女性4名、30～50代)、計96名。

2. 調査時期

2013年7月に小学校教師17名に、2013年8月に小学校教師44名・中学校教師21名・高校教師14名に対して質問紙調査を実施した。

3. 測度

①「子どもたちをどのような人に育てたいと思うか」についての設問：学校の教師が児童生徒に期待すると思われる人物像について、研究者4名で相談して考案した。「子どもたちをどのように育てたいか、どのような人になってもらいたいか」という設問に対し、15項目の中から5つまで選択することを求めた。

②協調性イメージ尺度：登張他(2012a)で作成された協調性尺度をもとに、協調的問題解決、調和志向および協力志向の下位尺度に該当する項目から、児童生徒の協調性の評定に使用できると考えられる項目を選択し、表現を変更して項目を作成した。さらに、規範意識に該当する項目を加え、全12項目とした。教師に対し、教師自身が考える「協調性がある子ども」イメージにどの程度当てはまるかについて、あまり当てはまらない(1)、どちらともいえない(2)、少し当てはまる(3)、よく当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。

③教師用児童生徒の協調性等評定尺度：登張他(2012a)で作成された協調性尺度30項目のうち、小学生等の児童の評定にも使用できるとと思われる15項目(一部は表現を若干変更した)と、さらに表現を変更した協調性または非協調性を表すと考えられる14項目に、自己主張(1)、視点取得(1)、協同学習態度(1)、同調(2)、攻撃性(1)を表す6項目を追加して、計35項目の尺度を作成した。教師に対し、自分のクラスや学校にそのような児

童・生徒がどのぐらいいるか、全くいない (1)、少ししかいない (2)、ある程度いる (3)、かなりいる (4)、大勢いる (5) の5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 教師が児童生徒に期待する人物像

「子どもたちをどのように育てたいと思うか」という設問に対する15項目のそれぞれについて、小学校教師、中学校教師、高校教師、小中高教師の4群で選択された比率を、多い順にTable 1 に示した。校種間による比率の有意差が見られたのは2項目のみであった(表中のa及びb)。

協調性と関連する内容で、最も多く選択されたのは「相手の気持ちを考えて行動する人」であり、続いて、「良い人間関係を築ける人」「道徳や規則をしっかりと守る人」「いろいろな人と協調・協力で

きる人」「人のために行動できる人」「人に迷惑をかけない人」「他人に対して寛容な人」といった項目が選択された。校種別で比較すると、「相手の気持ちを考えて行動する人」や「良い人間関係を築ける人」は中学校でやや少なめであるものの全校種において重視される特性である一方、「いろいろな人と協調・協力できる人」「道徳や規則をしっかりと守る人」については小学校においては低く、中学・高校と年齢が上がるにつれて重視される特性である。「人のために行動できる人」は中学校において高く、高校との間で比率の差が有意であった。

協調性以外の特性で多く選択されたのは、「夢を持ち、夢の実現に向けて努力する人」「自分の意見をしっかりと主張できる人」「自分らしさを大切にすることをする人」等である。「自分に厳しい人」については、中学校において高く、小学校との間で比

Table1 「子どもたちをどのように育てたいと思うか」という設問に対する選択の比率 (5つまで) (%)

項目	小学教師 N=61	中学教師 N=21	高校教師 N=14	小中高教師 N=96
相手の気持ちを考えて行動する人	85.2	76.2	85.7	83.3
夢を持ち、夢の実現に向けて努力する人	54.1	57.1	42.9	53.1
良い人間関係を築ける人	52.5	47.6	50.0	51.0
自分の意見をしっかりと主張できる人	47.5	42.9	50.0	46.9
道徳や規則をしっかりと守る人	42.6	47.6	50.0	44.8
いろいろな人と協調・協力できる人	29.5	42.9	50.0	35.4
自分らしさを大事にする人	36.1	28.6	14.3	31.3
人のために行動できる人	29.5	47.6	14.3	31.3 a
人に迷惑をかけない人	26.2	9.5	28.6	22.9
他人に対して寛容な人	18.0	14.3	21.4	17.7
難しい問題にも恐れず、立ち向かう人	14.8	23.8	7.1	15.6
十分な知識と能力を身に着けた人	16.4	9.5	21.4	15.6
謙虚な人	6.6	9.5	21.4	9.4
自分に厳しい人	1.6	19.0	7.1	6.3 b
自分を犠牲にして他者を助けることができる人	3.3	9.5	7.1	5.2

〈注〉 a 中学教師と高校教師間で比率の差が有意 ($\chi^2=4.143$, $p=.042$)

b 小学校教師と中学校教師間で比率の差が有意 ($\chi^2=8.268$, $p=.004$)

率の差が有意であった。「自分を犠牲にして他者を助ける人」という期待は優先順位が低かった。

2. 教師が考える「協調性」のイメージ

協調性のある子どもイメージ尺度12項目の得点について、調査人数の多い小学校教師と中学校教師とで平均値の差を比較するためt検定を行ったところ、有意差がなかったため、教師の所属校種別に分けずに分析を行った。評定の平均値が高い項目順に並べた表は以下の通りである (Table 2)。

評定の平均値が最も高い値を示していたのは、「周りの人と良い人間関係を作る」という項目で、

全ての教師が3 (少し当てはまる) あるいは4 (よく当てはまる) に評定していた。続いて、「相手の気持ちを考えて行動する」「他人によく協力する」「集団の和を意識して行動する」といった項目及び「ルールを守る」「クラスの秩序を乱さない」といった規範意識に相当する項目も平均点が高かった。一方、「人の言うことをよく聞く」「指示に従う」「意見が対立したとき、相手に譲る」「自分を抑えて相手に合わせる」といった、自分を抑え、相手に合わせたり従うなど消極的な項目に対しては、評定のバラつきも大きく、平均点も低かった。

Table2 教師による子どもの協調性イメージ評定の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
周りの人と良い人間関係を作る	3.00	4.00	3.86	.35
相手の気持ちを考えて行動する	2.00	4.00	3.80	.43
他人に良く協力する	2.00	4.00	3.69	.49
ルールを守る	1.00	4.00	3.64	.60
集団の和を意識して行動する	2.00	4.00	3.56	.58
クラスの秩序を乱さない	1.00	4.00	3.34	.71
誰に対しても好意的に接する	1.00	4.00	3.33	.70
周りの状況に合わせて行動する	1.00	4.00	3.24	.68
人の言うことをよく聞く	1.00	4.00	2.95	.88
指示に従う	1.00	4.00	2.34	.85
意見が対立したとき、相手に譲る	1.00	4.00	2.14	.83
自分を抑えて、相手に合わせる	1.00	4.00	1.96	.85

3. 教師が評定する子どもの協調性

協調性等評定尺度35項目の得点について、中学校教師が評定する中学生の得点と、高校教師が評定する高校生の得点について比較したが、中学生と高校生で有意差が見られた項目はなかったため、小学生と中学生の違いについての結果を述べる。35項目の得点について、小学校教師61名が評定する小学生の平均値と、中学校教師21名が評定する中学生の平均値を比較した。35項目中、2群で有意差 ($p < .05$) がみられた項目の平均値及び差の検定結果をTable 3に示した。Table 3に示し

た項目の得点は、すべて小学生より中学生の方が高いと評定された。「相手が納得するようにきちんと説明する」「自分と相手の意見が違うとき、両者が歩み寄れるような解決案を考える」「相手の立場に立って考えることができる」「チームプレーに徹する」といった積極的問題解決や視点取得を示す項目で特に大きな差が見られた一方で、「なるべく人と合わせようとしている」「人の意見に合わせることが多い」といった調和・同調志向を示す項目や「手伝いを頼まれると拒否する」といった非協調志向を示す項目でも大きな差が見ら

れている。

次に、小学校教師のうち、低学年の担任及び副担任28名が評定する小学校低学年と、高学年の担任及び副担任が評定する高学年の比較を行った。Table 4に、低学年と高学年で有意差が見られた項目の得点と差の検定結果を示している。これらの項目の得点は、どちらも小学校低学年の方が高学年より高かった（中学生でより低くなるわけではない）。「人と喜びを分かち合える」「みんなで何かやる時には進んで協力する」という項目は、

協力志向を示すものである。また、Table 3に示した項目の得点は、小学校低学年と高学年では有意差が見られなかったことになる。

小学校高学年と中学生の比較も行ったところ、Table 3に示した項目の大部分（Table 3にゴシック体で示した項目）は、小学校高学年より中学生の方が有意に高かった（ $p<.05$ ）。このほかに「自分が勝つことを一番大事にする」という項目の得点も、小学校高学年より中学生の方が有意に高かった（ $p<.05$ ）。

Table3 教師が評定する協調性 小学生と中学生の平均値の差の検定

項目	小学生 N=61	中学生 N=21	t値
なるべく人に合わせようとしている	3.38	3.80	-2.73**
人の意見に合わせることが多い	3.07	3.55	-2.90**
まわりの人に合わせすぎる	2.55	3.10	-2.30*
自分と相手の意見が違うとき、相手に従う	2.70	3.10	-2.47*
自分さえよければよいと思っている	2.49	2.90	-2.20*
手伝いを頼まれると拒否する	1.67	2.20	-3.53**
どんな人に対しても、なるべく相手の話を聞く	2.84	3.25	-2.31*
相手が納得するようにきちんと説明する	2.48	3.05	-3.26**
自分と相手の意見が違うとき、両者が歩み寄れるような解決案を考える	2.48	3.05	-3.56**
相手の立場に立って考えることができる	3.00	3.80	-4.41***
チームプレーに徹する	2.90	3.55	-3.20**

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

Table4 教師が評定する協調性 小学校低学年と高学年の平均値の差の検定

項目	低学年 N=28	高学年 N=21	t値
人と喜びを分かち合える	4.21	3.57	2.79**
みんなで何かやる時には進んで協力する	3.74	3.29	2.19*

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

〈注〉Table3と4は、有意差が見られた項目だけを示した。得点範囲1～5

IV. 考察

1. 教師が児童生徒に期待する人物像と教師が考える「協調性」のイメージ

教師が「子どもたちをどのように育てたいと思うか」について調査したところ、「相手の気持ちを考えて行動できる人」は小学校・中学校・高校の教師すべてにおいて最も多く選択された。「良い人間関係を築ける人」「自分の意見をしっかりと主張できる人」等、人間関係をうまくやっていく力に関する項目も高い比率で選択されていることから、対人関係において適切に相手に配慮したり、時には主張できることが重視されていると考えることができる。また、協調性を端的に示す項目である「いろいろな人と協調・協力できる人」については、小学校教師では30%未満と低いが、中学校教師では42.9%、高校教師では50.0%であり、年齢が上がるにつれて期待される特性であることが示唆される。また、「道徳や規則をしっかりと守る人」といった、規範意識の高さや自己抑制も対人関係をうまくやっていく力と関連して期待されていると考えられる。

「夢を持ち、夢の実現に向けて努力する人」「自分らしさを大事にする人」といった項目も高い比率で選択される一方で、「自分を犠牲にして他者を助けることができる人」の項目は3校種とも最も低い比率であったことから、自分を犠牲にして他者のために生きるよりも、個としての自分を大事にしながらか生きてほしいといった期待も伺える。

「人のために行動できる人」「自分に厳しい人」は中学校教師において高い比率で選択された項目であり、中学生という発達段階との関連において教師が期待する特性であることが示唆される。

また、教師が考える子どもの協調性のイメージについての調査では、周りの人たちと良好な関係を築き、相手の気持ちを考えて行動するなど、協調性の積極的側面（協調的問題解決、協力量向）が重視され、加えて規範意識の高さが重視されることが見出された。一方、協調性の消極的な側面を表す調和・同調志向は重視されない傾向が見ら

れた。

教師が児童生徒の期待する人物像と教師が考える協調性のイメージを比較すると、その内容は一致していることがわかる。教師が児童生徒に期待する人物像としても、良い人間関係を築けること、いろいろな人と協調・協力できること、ルールや道徳をしっかりと守る規範意識の高さが挙げられていることから、協調性を期待する回答は多いといえるだろう。教師の「協調性のイメージ」においても同様な内容の項目が「協調性に当てはまる」として選択されている。すなわち、教師が児童生徒たちに求める「協調性」のイメージは、協調的問題解決や視点取得の能力を発揮するとともに、高い規範意識を持って集団に参加しつつ、良好な人間関係を持つことができる子どもと言えよう。それに加え、期待する人物像としては、ひとりの人間として自立し、個としての自分を大切にしつつ夢を持ち、夢の実現に向かって努力するといった姿勢が求められているのである。

2. 教師が評定する子どもの協調性

小学生より中学生についての評定の方が高かったのは、相手に合わせるという調和・同調志向を示す項目と、自分中心で非協力的な傾向を示す項目、協調的問題解決傾向や視点取得を示す項目、チームへの協力を表す項目であった。これらの項目の得点は、小学校高学年と中学生の間で差が見られる場合が多かった。

中学生になると、調和志向や同調の傾向が高まるとともに、自己中心的・非協力的な傾向を示す者も増えることが示唆された。小学校高学年から中学生にかけての時期には、視点取得や協調的問題解決能力が高まることも示唆された。これらの傾向は、小学生の時期には大きな変化はないようであるが、人と喜びを分かち合い、進んで協力する傾向は、小学校低学年の方が高く、高学年になるに従って低下していくことが示唆された。なお、中学生と高校生の協調性には大きな違いがないことが示唆された。

小学生の協調性と中学生の協調性において違いが見られるのは、仲間関係の発達段階が関連しているためであると考えられる。小学校高学年から

中学生にかけての仲間関係は「ギャング・グループ」や「チャム・グループ」の段階であり、これらのグループにおいては仲間集団が同一であることが絶対条件とされており、親密さの中で仲間と同じであるようにピア・プレッシャー（同調圧力）がかかるとされ、反社会的集団行動の要因ともなると指摘されている（黒沢他, 2002）。そのため、この時期は、同調的な行動が増加するとともに自己中心的・非協力的な行動が増加するのではないかと推察される。

V. まとめと今後の課題

本研究では、小学校・中学校・高校教師を対象とした調査をもとに、教師が児童生徒たちに期待する人物像と「協調性のある子ども」のイメージを明らかにするとともに、教師たちが現に関わる児童生徒たちの「協調性」の発達をどう評価しているかを明らかにした。教師たちが児童生徒に期待する人物像は概ね教師たちが抱いている「協調性のある子ども」のイメージに合致するものであり、その内容は、協調性の積極的側面である協調的問題解決や協力志向であり、加えて視点取得、規範意識が求められていた。協調性の消極的な側面である調和・同調志向は期待する人物像としても協調性イメージとしても優先度は低かった。また、教師による児童生徒の協調性の発達に関する評定では、小学校低学年では協力志向が高く、小学校高学年から中学生にかけて、視点取得や協調的問題解決の能力が高まる一方で、中学生において調和・同調志向や自己中心的・非協力的な傾向が強まることも示唆された。これらの傾向は、中学生の仲間関係の発達段階の特徴とも関連して、中学生において教師が期待する人物像として「人のために行動できる人」及び「自分に厳しい人」が挙げられることから、現場の教師が生徒の指導に腐心していることが推察される。

また、教育現場で導入されてきている「協働学習」との関連でも、石橋他（2014）は、協働学習に取り組む中等教育学校において、教師が協働学習に対する心配・不安や有効性をどう認識しているかについての調査を行ったところ、教師は「考

え方の多様さと異なる視点の獲得」や「コミュニケーション能力の育成」「生徒の人間性の育成」といった点において有効性を感じつつも、「クラスの間関係がグループ作りに影響すること」や「生徒の個人的な特性によるグループ作りへの困難さ」などに対する不安・心配があることが確認された。学校現場では社会からの要請を受け、他者との関わりの中で話し合ったり問題解決する力を育成するために、「共同／協同／協働学習」が大きな働きをするとの認識を持ちながらも、一方で不安や心配、困難さを感じつつ様々な実践を行っている現状が伺える。上記のような不安や心配、困難さは、児童生徒の人間関係や個人的な特性の違いに関わるものであることから、グループ活動を円滑に且つ効果的に行うために児童生徒の社会性を育成することは、たいへん重要な課題であると考えられる。

今後は、この研究により明らかになったことをもとに、教育現場において教師が実際に児童生徒の協調性を育成するために、どのような取り組みを行っているのかを調査し、協調性を育成するためにより効果的な方策を検討していきたい。

〈付記〉本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)研究課題番号25380888（平成25～28年度）の成果の一部であり、日本心理学会第78回大会、日本教育心理学会第56回総会、日本発達心理学会第26回大会にて発表した。

引用文献

- 石橋太加志・千葉美奈子・橋本渉・細谷和博・南澤武蔵・秋田喜代美・小国喜弘・小玉重夫（2014）. 協働学習に取り組む中等教育学校教師が抱える不安と有効性の認識 東京大学大学院教育学研究科紀要, 54, 565-584.
- 木村あやの・登張真穂・大山智子・首藤敏元・名尾典子（2013）. 大学生のボランティア活動と協調性の関連 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 108.
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫（2003）. 仲間関係発達尺度の開発—ギャング、チャム、ピア・グ

- ループの概念にそって— 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33.
- 松尾剛・丸野俊一(2007). 子どもが主体的に考え、学び合う授業を熟練教師はいかに実現しているか—話し合いを支えるグラウンド・ルールの共有過程の分析を通じて— 教育心理学研究, 55, 93-105.
- 新村出(編)(1998). 広辞苑 第5版, 岩波書店.
- 名尾典子・登張真穂・大山智子・首藤敏元・木村あやの(2013a). 協調性と内的作業モデルとの関連 日本発達心理学会第24回大会論文集, 416.
- 名尾典子・登張真穂・大山智子・首藤敏元・木村あやの(2013b). 親和動機、内的作業モデル、仲間関係が大学生の協調性の発達に及ぼす影響 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1022.
- 名尾典子・登張真穂・首藤敏元・大山智子(2015). 教師が考える「協調性」イメージ 日本発達心理学会第26回大会発表論文集, P7-031.
- 大山智子・登張真穂・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2012). 協調性と仲間関係との関連 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 265.
- 大山智子・登張真穂・名尾典子・首藤敏元・木村あやの(2013). 大学生の仲間関係が協調性と共感性に及ぼす影響 日本心理学会第77回大会発表論文集, 59.
- 登張真穂(2010). 協調性とその起源—AgreeablenessとCooperativenessの概念を用いた検討— パーソナリティ研究, 19, 46-58.
- 登張真穂・大山智子・首藤敏元・木村あやの・名尾典子(2012). 協調性尺度の開発 日本心理学会第76回大会発表論文集, 23.
- Tobari,M., Nao,F., Oyama,T., & Shuto, To.(2013). Factors promoting the development of active and creative cooperativeness in Japanese youth. American Psychological Association 121th Annual Convention Program, 246.
- 登張真穂・大山智子・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2013). 大学生の所属サークルと協調性の関係 日本発達心理学会第24回大会発表論文集, 417.
- 登張真穂・名尾典子・首藤敏元・大山智子(2014a). 教師が評定する小中学生の協調性 日本心理学会第78回大会発表論文集, 17.
- 登張真穂・名尾典子・首藤敏元・大山智子(2014b). 教師は生徒をどのような人に育てたいか 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 325.
- 登張真穂・首藤敏元・大山智子・名尾典子(2015). 多面的協調性尺度の作成 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 637.

[抄録]

本研究の目的は、教師が児童生徒に対してどのような人物になることを期待しているのか、社会性の一側面としての協調性についての教師のイメージ及び現に関わっている児童生徒の協調性の発達をどのように評価しているか、について明らかにすることである。小学校教師、中学校教師、高校教師を対象として質問紙調査を行った。教師たちが児童生徒に期待する人物像は概ね教師たちが抱いている「協調性のある子ども」のイメージに合致するものであり、その内容は、協調性の積極的側面である協調的問題解決や協立志向であり、加えて視点取得、規範意識が求められていた。協調性の消極的な側面である調和・同調志向は期待する人物像としても協調性イメージとしても優先度は低かった。また、教師による児童生徒の協調性の発達に関する評定では、小学校低学年では協立志向が高く、小学校高学年から中学生にかけて、視点取得や協調的問題解決の能力が高まる一方で、中学生において調和・同調志向や自己中心的・非協力的な傾向が強まることも示唆された。